昭和50年度

武蔵国分寺遺跡
発掘調査概報

1976年3月

国分寺市教育委員会

目　　次

例　言 …… 1
1.　調査の概要 …… 2
2.　A地区の調査 …… 4
3.　B地区の調査 …… 5
4.　C地区の調査 …… 5
5.　D地区の調査 …… 6
6.　E地区の調査 …… 7
7.　F地区の調査 …… 8

図　面

第1図　地形図　(1:25,000)
第2図　調査地区位置図　(1:6,000)
第3図　A・C・D・E地区調査平面図　(1:100)
第4図　F地区調査平面図　(1:100)

図　版

第一　A地区の調査
第二　A・B地区の調査
第三　C地区の調査
第四　D・E地区の調査
第五　F地区の調査

例　　言

1. この概報は、国分寺市が昭和50年度に武蔵国分寺遺跡調査会に委託して実施した調査の概略を収録したものである。

2. 調査実施箇所は、A～Fの6地区である。

3. 発掘調査は、A地区を昭和50年5月23日に開始してより以後断続して実施し、12月25日をもって終了した。整理は、昭和51年1月6日より3月31日まで実施し、出土遺物の洗浄・註記、ならびにフイルム・実測図等の整理を終了している。

4. この調査の経費は国庫補助によるものであり、調査の遂行にあたっては、文化庁・東京都ならびに各土地所有者の方々の協力をえたことを記して、深謝したい。

5. 調査の地区割は、便宜的に設定している僧寺堂宇中軸線によるものであり、東西中軸線は、金堂中心より26.276m北へ寄る。南北中軸線は、磁北に対し北で 0°25′39″ 東偏する。

6. 遺構標示は、SI（住居跡）、SB（建物跡）、SD（溝跡）、SK（土坑）などの記号を使用し、遺構番号は、各遺構毎の連続番号を付して登録している。

1. 調査の概要

a．調査地区の位置と現状（第1図，第2図）

５０年度調査を実施した地区は、Ｆ地区が武蔵野段丘上であるのを除くと、全て立川段丘上に立地する。標高はＦ地区で約75ｍ、他は約63～65ｍである。

Ａ地区は僧寺・尼寺中間地域、Ｂ・Ｃ地区は僧寺々域内、Ｄ地区は塔址の南へ約300　ｍに位置し、Ｅ地区は尼寺址に近く、Ｆ地区は僧寺々域北東隅にあたる。

各地区の位置、現状、及び所有者をまとめると下表のようになる。

地区	位　　置	現状及び所有者
A	西元町三丁目－２１９０番地	市　道
B	西元町三丁目－２００４－１４番地	[redacted]氏所有地
C	東元町三丁目－１５５７番地	[redacted]氏所有宅地及び市道
D	西元町三丁目－１８９８番地	市　道
E	西元町三丁目－２２１１－１番地	[redacted]氏所有地
F	西元町二丁目－２５４６－２番地	[redacted]氏所有地

b．調査の契機及び目的

Ｂ地区の家屋増改築に伴なう事前調査を除いては、ガス管及び下水管埋設工事に起因するもので、工事による影響は最小限度におさえることで協力が得られ、更にこの機会に各地区に於ける様相を把握し、寺域確認調査に有力な資料を得る目的で工事区域外をも調査

したものである。

特にF地区に於ては、滝口氏推定の僧寺々域北限を画する東西溝の西端が南へ折れ曲がる部分を確認することが出来、更に周辺の様相も部分的ではあるが確認しえた。

c．調査の期間と発見遺構

A地区の調査を昭和50年5月23日より開始したのち、以下F地点まで併行あるいは断続して実施し、同年12月25日にF地区の調査を終え、現場に於ける作業は完了した。

発見遺構は、住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、土壙1基、瓦だめ1、室状遺構1である。

各地区の調査期間、発見遺構、調査面積をまとめると下表のようになる。

地区	調査期間	発見遺構	調査面積
A	昭和50年5月23日～ 5月30日	住居跡1，掘立柱建物跡1	20㎡
B	〃 6月19日～ 6月21日	瓦だめ1	15㎡
C	〃 8月 1日～ 8月26日	住居跡1,土壙1,室状遺構1	60㎡
D	〃 8月 7日	住居跡2	20㎡
E	〃 8月11日～ 8月13日	溝跡1	25㎡
F	〃 11月28日～12月25日	溝跡2，住居跡1	160㎡

2. A地区の調査

a．調査にいたるまで

市立第四中学校前にて、個人宅へ引き込むガス管埋設工事（巾1m、延長80m）が計画され、事前に試掘調査を実施したところ、延長80mにわたって、住居跡・ピット等の落ち込みが断続的に確認された。協議の結果、当初全面開削の予定であったものを、推進工法にきりかえ、四ケ所20mについては工法上掘削を要する為本調査を実施した。

この結果、北端部分に於て住居跡が検出された為、この全体を検出する目的で、道路部分全体にわたって調査を実施した。

b．発見遺構　（第3図－3，図版第一・第二）

S I 82住居跡　住居跡西側が調査区域外に伸びる為、全体は明らかでないが、調査部分で東西 3.2m × 南北 3.4m の長方形の平面で、カマドは北壁中央南寄りに瓦を芯として構築している。

壁高は15～20cmでカマドの北側に接して貯蔵穴がある。床面は全体貼床で中央部に三ケ所床面が焼けている。周溝はカマド前面を除く、北・南・東壁下にある。柱穴は不明である。西側床面下には周溝が検出されており、住居西側の増築が考えられる。また建物跡の掘り方3個が床面下に検出されている。

遺物の主なものとしては緑釉の高台付皿、「山」の墨書がある土師器の坏が出土している。

ＳＢ34建物跡　南北２間以上東西２間以上の建物で、南北東西方向とも未調査のため規模は明らかでない。柱間寸法は東西1.8.m（６尺）、南北2.4～2.9ｍ（８～１０尺弱）である。

ＳＩ82との重複関係が認められ、ＳＩ82よりも古い。

3. Ｂ地区の調査　（図版第二）

増築部分の内、七重塔に近い北側部分を調査し、その結果によって東側部分を調査することとした。

北側部分を全体にわたり発掘したところ、七重塔をめぐるような溝の一部が発見された。

ただし、増築の基礎より下の部分で上面が確認されたので、溝の上面の実測と北側部分の断面図を作成して調査を終了する。溝は他の記録と考え合わせると瓦だめと思われる。

4. Ｃ地区の調査

a．調査にいたるまで

公共下水道南部３号幹線工事に係る立坑部分の試掘調査の結果、住居跡の西南コーナーが検出されたので、協議の結果、位置変更が困難の為、本住居跡を調査した。

この結果、該住居跡が隣接する作業基地内に延び、さらに作業基地内に於て、本住居跡と重複する遺構（室状遺構）が検出されたので、併せて本調査を実施することで協力を求め調査を実施した。

b．発見遺構　（第3図－2，図版第三）

S I 99 住居跡（？）　北側は攪乱をうけ、東側は近世の室状遺構によって破壊されており、西南部分（西壁が約3m、南壁が約1.7m）が残るのみで、全体プランは明らかでない。壁は屈折し、立上りはゆるやかである。床面までの深さは20～25cmを測る。床面はほぼ平坦でしっかりしている。住居跡とする積極的根拠はない。

S K 112 土坑　東西1.2m×南北2.2mの長方形土坑で、底面までの深さは30～45cm程である。新しい時期のものである。

室状遺構　東西2.8m×南北5.7mの南北に細長い落込みで、床面最深部までの深さは約2m（現地表面からは2.3m前後）を測る。東側に北より南にかけて傾斜するスロープを造る。途中7段の階段状削平をする。床面は東西1m×南北4.8mでさらに細長くなり、南より1.2mのところに巾30cm、高さ20cmで区切りをつけるように土手が残る。床面のレベルはほぼ水平である。出土遺物は江戸末より明治期にかけてのものが多い。土地の方より話を聞いたが、覚えておられる方はいない様である。

5. D地区の調査

a．調査にいたるまで

公共下水道北多摩1号排水区第1分区枝線布設工事において下水管推進坑No.11の試掘調査で竪穴住居跡が確認された。その後位置の変更等を協議したが、困難とのことであった。8月7日に調査を実

施し、２軒重複した住居跡を発掘した。すでに埋設されていた下水管・水道管・ガス管により破壊されていたためと調査出来る範囲が限られていたために２軒とも全体は判明しなかった。

b．発見遺構　（第３図－４，図版第四）

ＳＩ93住居跡　北壁中央にカマドを有するが、大部分は範囲外になるため状況は不明である。瓦組みのカマドと思われる。

ＳＩ94より古く、カマド前面はＳＩ94に切られている。壁にそって周溝が認められる。床面は中央部が残っていないためはっきりしないがあまり固くない。

ＳＩ94住居跡　東壁にカマドを有すると思われるが、水道管・ガス管埋設により大部分破壊されている。カマド前面の焼土と思われる焼土面が少し認められる。ＳＩ93より新しく、ＳＩ93の床面より約10 cmほど深く、ＳＩ94の床面となっている。北壁、西壁にそって周溝を有する。東壁では周溝は認められない。東壁から考えると、住居跡の深さは60 cmを超えるものと思われる。床面は良くしまっている。ＳＩ93・94住居跡は、武蔵国分僧寺金堂中心から南へ420 mほどに位置し、今までで最も南で確認された住居跡である。

6.　E地区の調査

a．調査にいたるまで

公共下水道北多摩１号排水区第１幹線布設工事に伴い試掘調査を

実施したところ、住居跡が確認されたため、協議の結果位置変更がなされたが、変更部分についてあらためて試掘調査を実施したところ溝跡が確認された。再協議の結果、設計上からこれ以上の位置変更は困難であるということから、本調査を実施したものである。

b．発見遺構　（第3図－1，図版第四）

ＳＤ22溝跡　この溝は南北中軸線に対して北で約 10° 東偏し、南北方向へ延びる素掘溝である。今回調査されたのはその一部分で、南北中軸線よりおよそ 262.5 m 西に位置している。溝の巾は約 1 m で、深さは南側で約10～20 cmとおおむね浅いが、中央付近で段状に落ち、これより北は10 cmほど深くなっている。この北側部分に性格不明のピットが四つ検出された。うち三つは東側の溝壁に沿い並んでいるが間隔は一定でない。ピットの深さは南から各々13 cm、28 cm、26 cm、16 cmである。

7.　F地区の調査

a．調査にいたるまで

公共下水道南部3号幹線工事に係る作業基地建設工事に伴い試掘調査を実施したところ、用地東側で南北に走る溝跡が検出された。この溝跡は、以前より用地南側露頭等に於て確認されていたところであるが、更に北へ延びて、薬師道下を東西に走る溝（滝口氏推定僧寺々域北限の溝、昭和41年再発掘）と結びつくことが判明してい

たので、協議の結果作業基地建設は掘削を加えないで実施することで協力が得られ、更にこの機会にこの溝を含めて市道下に存在するコーナー部分及び周辺の状況について確認調査を実施することで、土地所有者等の協力が得られた。

b．調査の経過

作業基地内に南北トレンチ1本、東西トレンチ2本を設定し試掘調査を進めた結果、2本の東西トレンチ東端で南北溝が検出されたので、ひき続き本調査を実施し、溝の全体をあらわすとともに、更に北の道路舗装をはがし、東西溝及び南北溝と交わるコーナーを検出した。

この東西溝の延長線上西へ約30mの位置（宅地内）で、東西約1m×南北約8mの範囲で試掘したところ、金堂中心より北へ約257mの位置で、東西溝を確認した。

金堂中心より約240mの位置で、巾約2mでトレンチを東西に設定し、溝中心より約14m西まで調査したが、トレンチ西端で住居跡が確認されたのみで、他の遺構は検出されなかった。

c．発見遺構

SD23溝跡　巾約2m、深さ約0.8mの素掘溝で、壁はほぼ垂直に立上り、底面は平坦である。底面は更に巾約0.9m、深さ0.1～0.3m程に二段掘され、断面は「└─┘」形を呈する。新旧二時期にわたるものと思われるが、土層断面では確認出来ず、また貼床等もなさ

れていなかったので不明である。

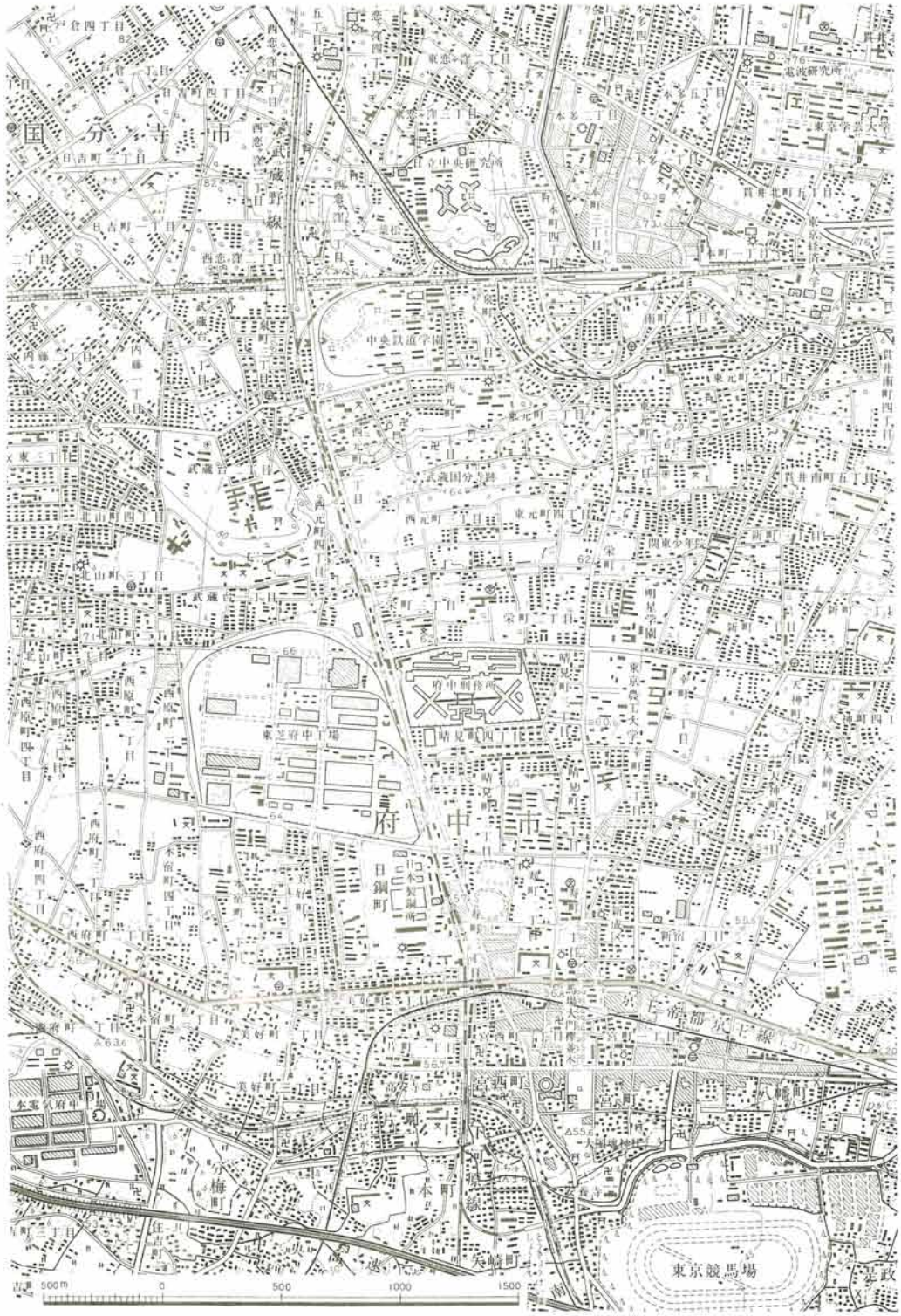
南北溝と東西溝及び両者が交わるコーナーが検出されたが、東西溝が西へ更に延びるものか否かについては、壁が立上る為おそらく切れるものと思われるが、若干歩道下にかかる為全体を調査し得なかったので断言出来ない。

溝の周辺及び溝内（おもに底面）に大小のピットが二十数本検出されたが、その性格は不明である。

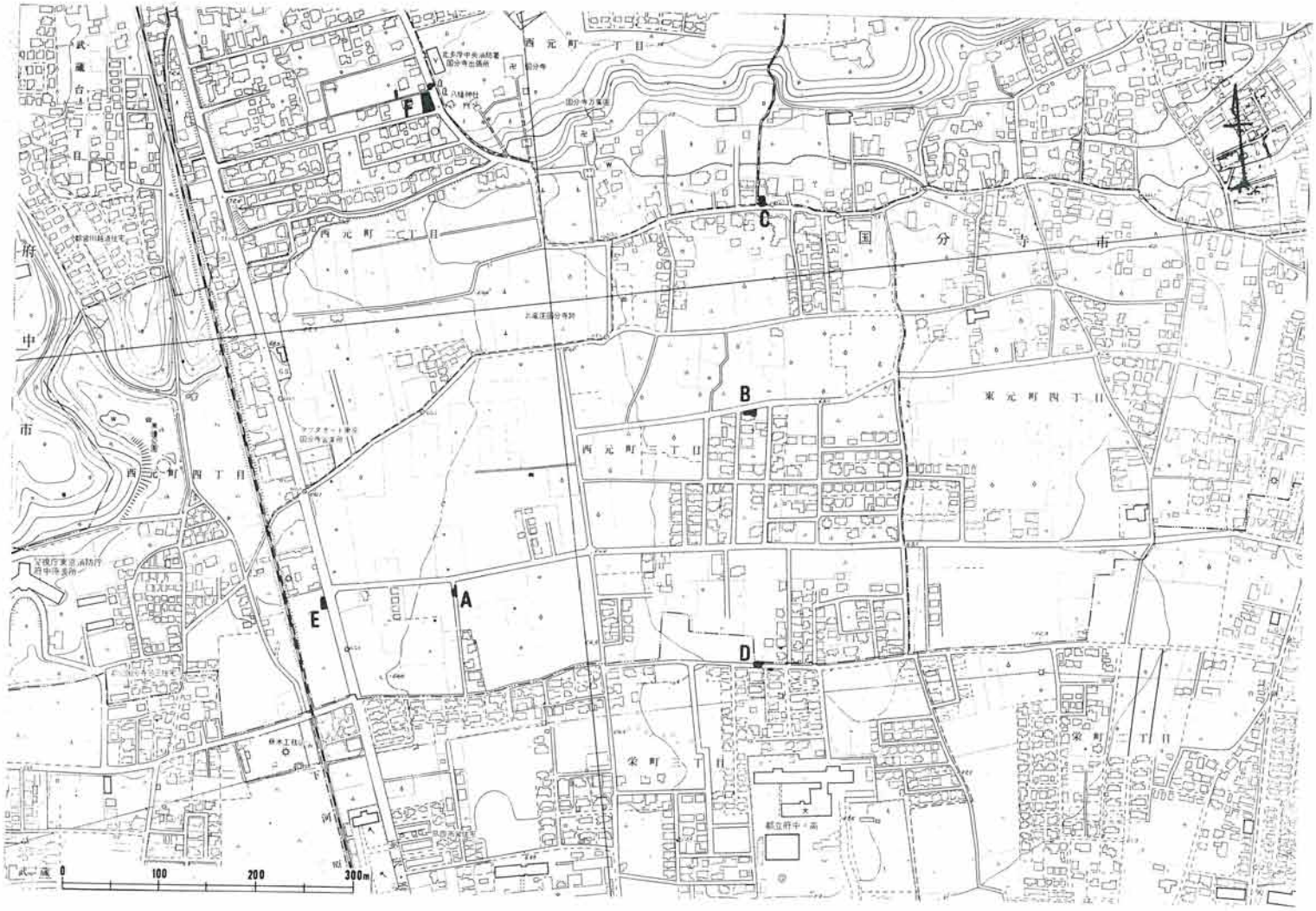
遺物は殆ど溝内堆積土上層に於て出土した。

南北溝の中央北で、中軸線より西へ 100.5 m、同じく南で 102 m となり、北が若干東へ偏する。

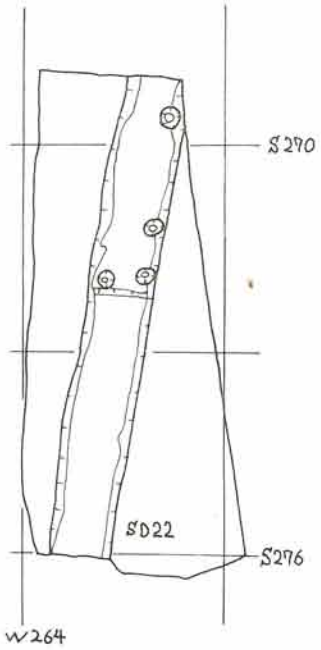
東西溝の中心で、金堂中心より北へ 260.276 m の位置になる。



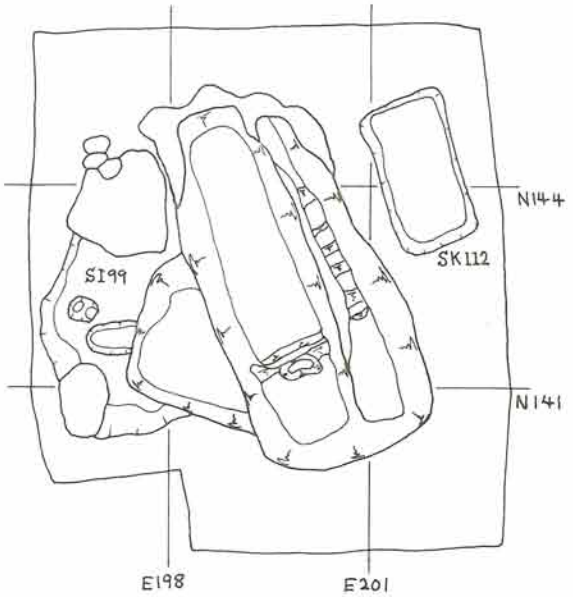
第１図　地形図　（1：25,000）



第２図　調査地区位置図　（１：3,000）

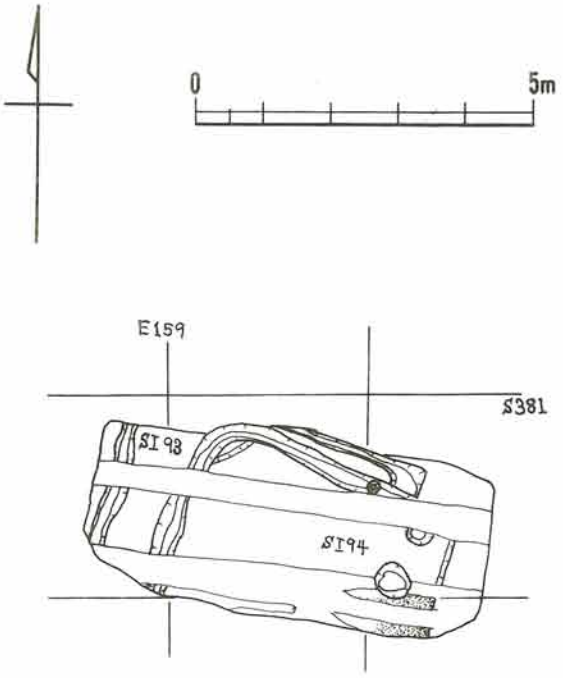


1. E地区調査平面図



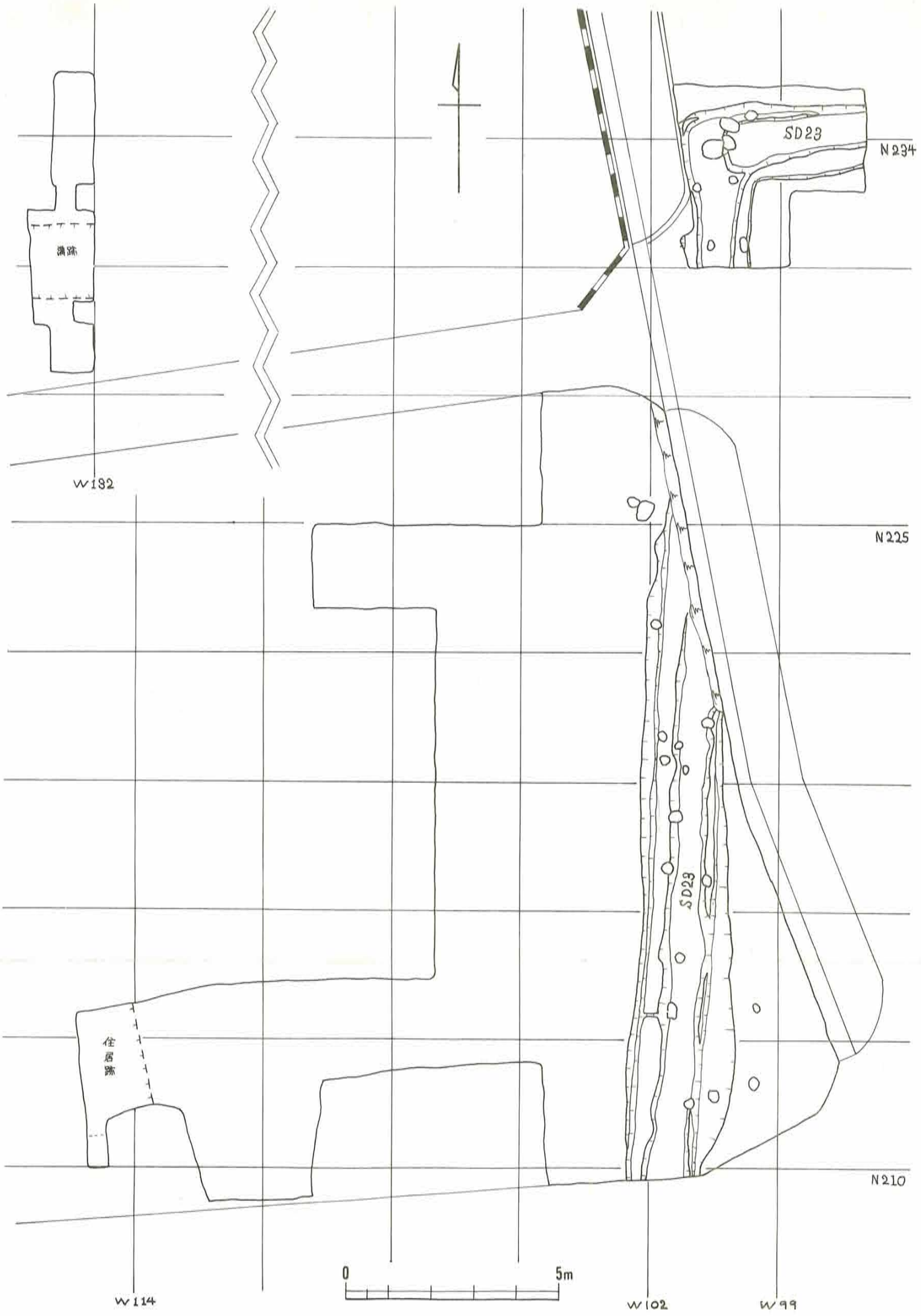
2. C地区調査平面図

3. A地区調査平面図



4. D地区調査平面図

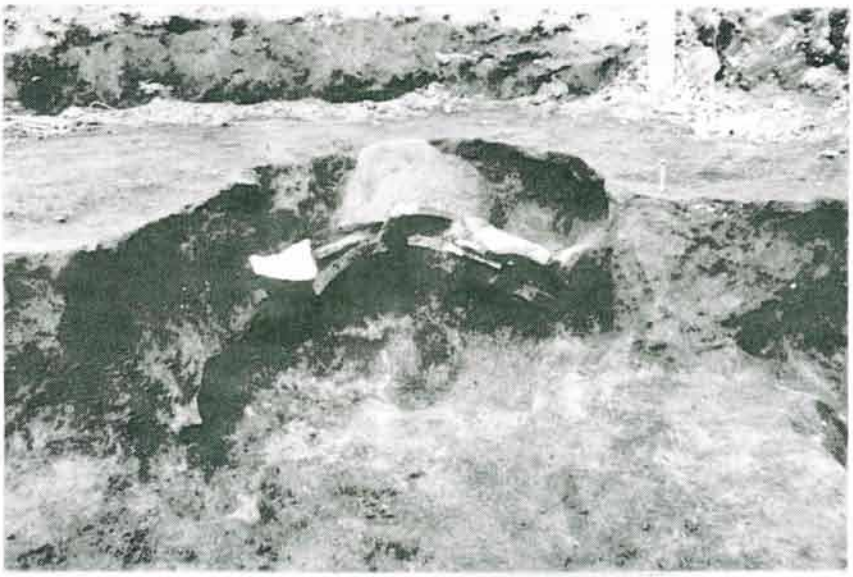
第3図　A・C・D・E地区調査平面図（1:100）



第４図　Ｆ地区調査平面図　（１：１００）

1.　ＳＩ８２住居跡　南から

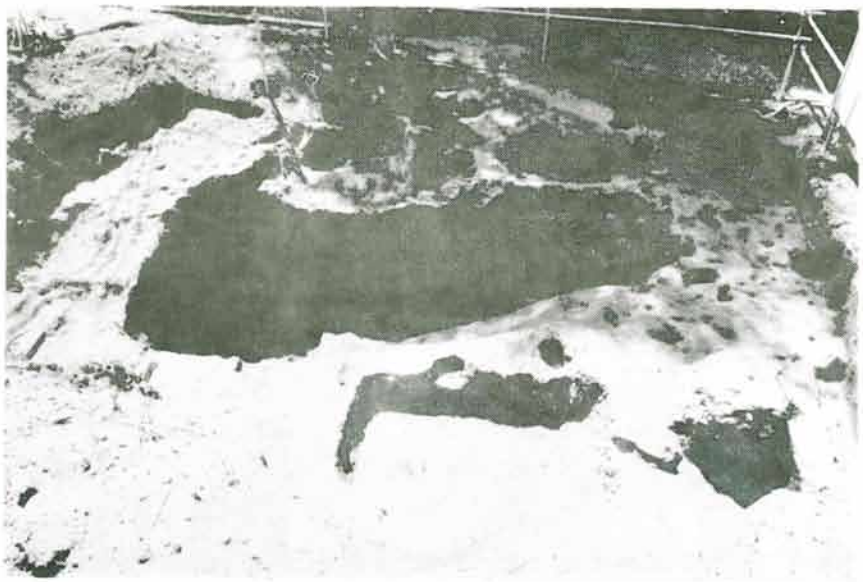
2.　ＳＩ８２住居跡　北から



1.　ＳＩ８２住居跡　カマド　南から

2.　Ｂ地区全景　西から

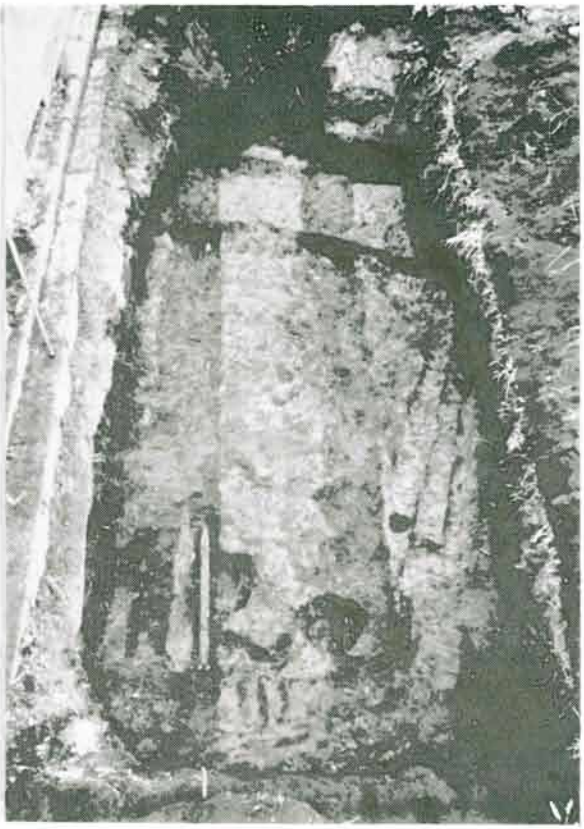
図版第三　Ｃ地区の調査



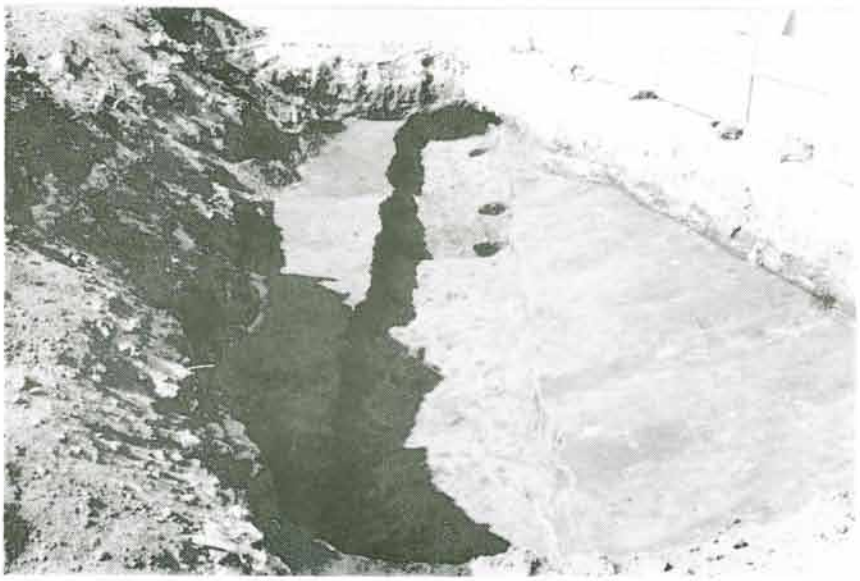
1.　全景　東から

2.　ＳＩ９９住居跡　南から

図版第四　D・E地区の調査



1.　D地区　ＳＩ９３・９４住居跡　東から



2.　E地区　ＳＤ２２溝跡　南から

図版第五　F地区の調査

1.　ＳＤ２３溝跡　南から

2.　ＳＤ２３溝跡　東から

昭和５０年度
武蔵国分寺遺跡発掘調査概報

発行日　昭和51年３月31日
編　集　武蔵国分寺遺跡調査会
発　行　国分寺市教育委員会

令和４年（2022）８月16日　デジタル版作成
底本はＢ５版。
個人情報削除

昭和 48 年 9 月 撮影